

『近くて遠い国から・・・』

～韓国「釜山日本人学校」2007年度派遣～

北海道十勝 芽室中学校 教諭 伊藤 道彦

1. 韓国の概要

正式国名は「大韓民国」(Republic of Korea)。

面積は約9万9720平方キロメートル、日本の約29%。人口は約4954万人、日本の39%である。首都は「ソウル」であり、実にソウル市とその周辺に人口の約半分が住んでいる。

人口密度は日本の3倍、ニューヨークの8倍となっておりソウルの気候は北海道とよく似ている。



[国境の警備]

大韓民国は朝鮮半島において、軍事境界線（俗に言う38度線）を挟み朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）の統治区域と対峙する分断国家となっている。

また、太平洋戦争時の日本による統治時代が原因で、対日感情が強かったが、2002年のワールドカップ以降若者世代を中心に親日の動きが多くなり、日本語習得率は英語に次ぐものとなっている。



[38度軍事境界線
左側が韓国]

2. 釜山の概要

海と河と山が印象的な地プサン。

しかし、人口は釜山広域市370万人を数え、韓国第二の大都市である。人口にみあうだけの交通網は地下鉄を筆頭に発達しており、交通渋滞は珍しくない。高層マンションが群をなし、近代化の最先端を象徴する。



[釜山港付近]

それでも、ここプサンが息苦しくないのは、やはり自然が目の前にあるからであろう。特に、海である。釜山日本人学校の佇む場所は釜山でも有数のリゾート

ビーチから内陸に200mの所にある。

よって、私達職員が住む高層アパートもこのリゾート地の中に用意され、ベランダからすぐ目の前に広がる海を毎日見ながら過ごす生活は、間違いなく心を豊かにしてくれている。そしてそれはもちろん、釜山日本人学校の屈託のない明るい子ども達、学校をしっかりと支えてくれる保護者、力ある教職員の仲間という三要素が根底にあってそう感じられるのだと理解している。有り難いことである。



[住宅のベランダより]

釜山の緯度は京都府と同じくらいであるが、夏は大陸性の気候により暑い乾燥している。冬、雪が積もることはほとんど無く、春と秋が長く実に過ごしやすい。

釜山の物価は日本とほぼ同じであるが、食べるもの、着るもの、乗るものについては格段に安く、生活はしやすい。タクシーの初乗りは180円程度である。ただし、交通マナーについては世界の中でも悪評が高く、歩行者よりも車が優先される車社会となっている。そのため、私たち派遣教員は内規により車の運転を禁止されている。

釜山の人々はまさに浜っ子気質であり、情に厚い。仲良くなると、とことん面倒を見てくれる。

3. 釜山日本人学校



1974年（昭和49年）5月1日補習授業校として開校。翌1975年（昭和50年）10月1日、日本人学校となる。

2009年度末、児童32名 生徒10名 計42名の在籍であった。派遣教員9名、現地採用職員5名（事務1、校務補兼警備員1、英会話講師1、韓国語講師2）。

朝鮮半島の南東の海岸沿いに位置する釜山日本人学校は、言わずと知れた日本に一番近い日本人学校である。校舎は3階建ての大きな洋館という風貌で、子どもの数が多くなると、少々手狭になる。グラウンドも狭く、かろうじて1週

80m、円弧上曲直線が50m取れる程度である。

子ども達に「釜山日本人学校はどんな学校？」と聞くと『家族みたいな学校』という答が返ってくる。まさに、小さいながらも楽しい我が家となっている。

○特色ある行事

① I S Bスポーツデイ（5月）

インターナショナルスクール3校と、釜山日本人学校の4校で陸上競技を中心とした競技大会が、ワールドカップ会場横のサブグラウンドで行われる。最終的に各種目でポイントが入り順位を付ける事になるが、交流目的であり、互いの健闘をたたえ合う時間が設けられている。ちなみに2009年度は2位であった。



[長距離走]

② 小学部キャンプ（5月）

小学1年生から6年生全員でキャンプをする。登山やオリエンテーリング、ゲーム、カレー作りを最上学年が中心となって全員で行う。どの学年もキャンプを乗り越え確実に一回り大きく成長する。年度の人数構成によっては学校キャンプとなるが、地の利を生かしたビーチでの楽しいイベントなどもあり、釜山日本人学校の大事な行事である。



[カレー作りの一コマ]

③ 水泳教室（6月）

学校にプールが設置されていないため、一流ホテルのプールを借りての水泳教室が行われる。5日間連続の授業ではあるが、その成果は十分である。海を望む景観の中、全学年が必死に泳ぐ。



[50mの本格的リゾートプール]

④ナザレ園訪問（7月）

【ナザレ園について】

日本による朝鮮半島統治時代、沢山の朝鮮人男性が日本へ無理矢理連れてこられた。その中に、日本の女性と恋に落ち、結婚をした者も多数あった。戦争が終わり多くの朝鮮人は祖国へ帰ることとなる。

その時に一緒について行った日本人妻たちがたくさんいた。その後、朝鮮半島では南北を分けるに至った痛ましい朝鮮戦争が起こり、日本人妻達の夫も沢山亡くなった。しかし、夫が死んでも日本人妻達は日本へ帰ってこられなかった。

朝鮮を軽んじてみる風習があったため、朝鮮へ渡るのであればもう戸籍を抜いて死んだ者として渡りなさいと言われ日本の戸籍がない人。戦争で夫や子どもと生き別れになり、いつか会えると信じ韓国に留まる人、日本にはもう身よりのない人様々なそれぞれの理由で韓国に残った女性達があった。言葉も話せず、冷たい目で見られ、反日感情のまっただ中で貧しく暮らしていく辛さは想像に耐えない。

そんな中、金龍成（キムヨンスン）と言う人物が『同胞の青年を愛してくれた日本人を見過ごすわけにはいかない！』『日本人妻達は、韓国人を差別する側にいられたのに、差別される側の嫁に来てくれた。そういう人たちをいい加減に扱ったら、自分たちの対面がすたる。』と私財をなげうって日本人妻のために保護施設を作った。それが「ナザレ園」である。

現在もご高齢のおばあさんたちが十数人、素晴らしい設備の中暮らしている。

そして、ナザレ園の墓石にはこのような言葉が刻まれている。「私達は死んで韓国の土になります。でも、魂だけは日本へ帰りたい」



〔劇：大きなかぶ〕



〔手遊びで交流〕

釜山日本人学校は年に1回、韓国で壮絶な人生を送り、韓国に暮らすおばあさんたちに会いに行く。慰問というよりは、元気をもらいに行く。そのた

めにしっかりと準備をし、おばあさん方の笑顔のために一生懸命劇や歌や踊りを頑張る。

「ふるさと」を歌うと涙を流しながら一緒に歌ってくれる。帰りのバスの中で温かい気持ちになるそんな行事である。残念ながら、訪問の度にお婆さんの人数は少なくなっているが、最後まで続けていくべき行事である。



[ナザレ園の皆さんと一緒に]

⑤運動会（9月）

釜山日本人学校の運動会はグラウンドが狭いために、現地の小学校のグラウンドを借りて行う。そして、何より釜山日本人会との協賛であるため、沢山の日本人の方が集まってくれる。この日ばかりは日本にいと錯覚してしまう。



[運動会に参加した皆さん]

⑥PTAバザー（10月）

釜山日本人学校は児童・生徒数が少ないため、財政的にとても厳しい学校です。そこで、教員の配偶者がバザーを開いて運営資金に充てたというのが始まり。現在では日本人ばかりか韓国人も多数来てくれる。

釜山日本人学校の運営を支えるため、PTAと子ども達が出店し、日本人会が総力を挙げて行う行事。沢山の企業にバックアップされている。



[恒例のくじ当選会]

⑦広安里〈カンアンリ〉マラソン（10月）

学校のすぐ側にある広安里ビーチにて、地の利を生かしたマラソン大会が開催される。景色は素晴らしいのですが、砂地に足を取られ走りにくいのが欠点。しかし、釜山日本人学校の子供達は決して手を抜かない。常に一生懸命頑張っている。



[波の音を聞きながら]

⑧三校交流会（11月）

他の日本人学校同様、在外施設という特異性を生かし、韓国の現地校、そしてインターナショナルスクールとの交流も盛んに行っている。行事の中で司会者（子ども）は韓国語・英語・日本語の3カ国語を操りながら会を進行し、他の子ども達も身振り手振りを交えながら交流をする。まさに他の国との架け橋となっている。この「三校交流会」はまさに釜山日本人学校を代表する取り組みと言える

このワークショップの一環で、5年生が3カ国語『落語』に挑戦した。日本語であっても伝統芸能『落語』は難しい。それを韓国語・英語でもやるというのだから、完成に至るまでの厳しさは想像以上。しかし結果は苦勞の甲斐あって大盛況となった。他校の先生達も子ども達の巧みな芸に皆舌を巻いていた。

こういった、一人一人をピンポイントで成長させていくことができるのもこの「釜山日本人学校」の良さである。



[現地校による伝統舞踊]



[英語による落語]



[3カ国語を話す低学年]

⑨新年お楽しみ会（1月）

海外にいても日本のお正月を味わわせてあげたいというこの行事。保護者の協力で「もちつき」を毎年やっている。臼は韓国式の石臼だが、味は格別。子ども達ばかりでなく日本人会の皆さんも一緒に餅をつく。お昼はみんなで作った餅とお母さん方が作ってくれる豚汁で楽しい一時を過ごし、午後からは福岡にある柳沢企画の柳沢さんのご厚意で、芸能を楽しむ。芸能人や相撲取り、マジックなどで毎年盛り上がる。色々な方の助けを借りて釜山日本人学校は成り立っている。



[餅をつく中学生]

⑩講話朝会（不定期）

朝会の時間にいろいろな人たちに講話をしていただく。教師は全員が順番で講話をする。自分の得意分野であったり、お里自慢であったり、趣味の話、体験してきた武勇伝などその内容は様々である。その他の講師として、学校運営員の方々、おもしろい職業に就いている人などにもお願いして、よ



[科学実験を体験させる教諭]

りグローバルな視野から子ども達に驚きを与えてもらっている。月に1, 2回程度の頻度で行われている。日本人学校ならではの取り組みである。

4. 雑感

在外施設派遣教員として日本を離れ、海外で任に当たる上でのその責任の重さと、重圧は最後の最後に痛感することとなった。それは任期を終え、いよいよ日本に帰る飛行機が離陸をしたその瞬間にやって来た。万感の想いがこみ上げてくると共に、胸に広がる安堵感と体中の筋肉が弛緩していくような感覚。自分でも意識できないところで闘っていたんだとその時知った。「3年間全てを出しきった」と思った。

そして今あらためて3年間を振り返り思うことは、人に支えられたということだ。職員スタッフからは全員で学校を創り上げる喜びを頂き、保護者の方々からは自信を、日本人会の皆さんからは日本人としてのアイデンティと外国でいかに日本人として生きていくかのプライドを授かり、家族からは一緒にいられることの喜びを、懇親にいただいた韓国の人たちからは、人間としての尊厳を。そして何よりも釜山日本人学校の子ども達からは教師という職業の楽しさをあらためて教えてもらった。これらはこれからの一生の宝となった。

さて、縁あってここ韓国、とりわけ日本との交流の中心地、発信地であったプサンに住むことで、両国がいかに関わり、いかに時代に翻弄されてきたかを、恥ずかしながら初めて知ることとなった。つい十数年前までは、日本人学校の職員は公共の乗り物の中で日本語を話すことを我慢し、校門に「釜山日本人学校」を掲げることも出来なかった。それほど根深い日本への感情がこの国にはある。六十五年前の戦争終結までの三十数年間、ここは日本の統治下にあった。日本の名前を強制され、

学校では日本語教育を義務化され、日本人として生きることを強要された。沢山の朝鮮人が日本に無理矢理連れてこられ、日本のために死んでいった。戦後、このことを忘れまいとする教育が国を挙げてここ韓国に根付いた。

だが、息子が通った現地幼稚園のスタッフ、近所の方々、お店の人達。ココプサンの人々は皆私達に優しくしてくれた。下町情緒とでも言うべき気持ちの良さがしっかりと根付いていたのである。釜山の人達は優しい。実はこの人の良さが釜山の居心地をいいものにしてきていた最大の要因なのである。そういう優しさに触れるたび、韓国と日本の歴史的悲劇が乗り越えられつつあるのだと強く実感した。

同世代の韓国人の友人と飲んだ時、彼は言った「オレたちは歴史を学んだ。でもそれは過去のことを学んだのだ。オレとお前は過去の間人ではない。今を生きる人間なのだ」と。世界の中で生きるということは相手を理解することから始まる。

「近くて遠い国から、近くて共に進む国」へ韓国と日本が変わっていくように。さて、私は次に何が出来るだろうと、学校を見つめる昨今である。



[サミットが行われた「ヌルマリ」と遠くにカンアン大橋を臨む。

橋の向こう側に釜山日本人学校がある]